

芸術銀河2012 × Art Support Tohoku-Tokyo

なんの
ための
アート

復興への長い旅路、私たちはどこへ向けて航海を始めるのか。

地球は生命体である。水は循環し、大地は少しずつその表情を変えながら変化を続けている。その変化はときに急激に大規模に起こり、私たちの生活圏を広範囲に破壊したくさんの生命を奪う。人はそれを天災、あるいは震災と呼ぶ。私たちは、常に天災と隣り合わせに生きてきた。そして、苦渋、辛酸の歴史の中から、知恵を絞り、災害に向かってさまざまな備えをしてきたが、災害が遠のき世代が変わると、記憶は薄れ知恵は十分に伝承されず、永い年月の中で天災による被害は地層が重なるように幾重にも積み重ねられてきた。三陸地震大津波だけをとってみても、この千年で少なくとも10回以上、ここ百年だけでも3回の大災害に見舞われ、大きな被害の爪痕が各地に残されている。

400年前、1611年に発生した慶長三陸地震は今回と同規模の災害であったと推測されている。ときの仙台藩主伊達政宗は、災害から2年後の1613年に慶長遣欧使節を石巻からスペインへ向けて出航させている。目的は仙台藩とスペインの通商交渉であり、大災害からの復興をスペインとの通商に賭けたとの見方もある。特筆すべきは、この航海が日本人として初めて太平洋・大西洋の横断に成功した航海であり、日本人が初めてヨーロッパの国へ赴いて外交交渉をした画期的な出来事であったということである。大災害のあと不安と混乱の残る中で、伊達政宗はどんな思いを込め使節を派遣したのか。使節一行は、未踏の航海、未知の国への渡航にどんな思いで臨んだのか。想像するに余りあるが、いずれ人はどんな災害に遭遇しようとも、それを乗り越え、力強く次の世代を築いていく存在だということを感じさせると同時に、私たちの魂を深く鼓舞する話である。

さて、「なんのためのアート」である。このシンポジウムでもフォーラムでもない新たな装いをもった集いは、基調公演と3つのクロストークと参加者の話し合いをサンドイッチしたしつらいで、現地最前線での活動、外部からの支援活動、アートの最前線や文化政策からの視点など、さまざまな角度からの報告、思索、検証などが参加者一人ひとりへ向けて開かれ提示された。それらは、結論へ向けて収斂していくようなベクトルは持たず、むしろ新たな混沌を生むような幅広いグラデーションの様相を呈しており、ある人にとってはこれまで抱えていたモヤモヤを解消するものであったと同時に、またある人にとっては新たなモヤモヤを生む機会となったものと思う。しかし、捉え方と解釈は百人百様でいい。むしろ優れたアートが常に賛否両論を呼ぶように、この集いが解釈のヴァリエーションによって物議を醸すのであれば、それはそれで歓迎すべき成果の一つと断言していいのではないかと断言する。

そもそもアートは、常識や既成概念を取り払い、新しいアイデアや感性をそこに注ぎ込

むことで自由で新鮮な表現を手に入れその存在意義を確立してきた。今回の震災は、自然という圧倒的な力が常識や既成概念を破壊し、私たちは否応なく日々の生活から自己の存在意義までを問い直さなければならぬ状況に追い込まれ、更にこれからの社会をどのように再編していくのかという問題を突きつけられている。この根源的な問いは、常にアートが抱えてきた問題であり、震災が潜在化していたその問いを顕在化させたのだと言える。私たちは、これから長い時間をかけてそれらを考えて行くのだと思う。

この企画は、東京アートポイント計画*が試みてきたさまざまな方法論と成果をベースに構成されており、アートの最前線で起こっている現在進行形の試行錯誤の一つと断言していいのだと思う。そして、宮城と東京が協働し、多数の全国から参加した立場を異にする人たちが、復興へ向けた途中経過として、震災とアートについて情報を共有、交換する場として貴重な一石を投じることができたのではないかと考えている。

もう一度書く、人はどんな災害に遭遇しようとも、それを乗り越え、力強く次の世代を築いていく存在である。今年、慶長遣欧使節が石巻からスペインへ出航してからちょうど400年目の年にあたる。私たちは、復興後の未来をどのように描き、どこへ向けて航海を始めるのか。伊達政宗の偉業に私たちが驚嘆の念を抱くように、400年後の子どもたちが、私たちの選んだ道に畏敬の念を抱けるような、そんな選択をしたいものである。いずれ私たちは、復興への長い旅路の端緒についたばかりである。

Art Support Tohoku-Tokyo
東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業
宮城県事務局（えずこホール）水戸雅彦

*東京アートポイント計画は、東京の様々な人・まち・活動をアートで結ぶことで、東京の多様な魅力を地域・市民の参画により創造・発信することを目指し、「東京文化発信プロジェクト」の一環として東京都と公益財団法人東京都歴史文化財団が展開している事業。www.bh-project.jp

芸術銀河2012 × Art Support Tohoku-Tokyo

なんのためのアート

震災後、芸術文化の担い手は どのような活動を形にし、つづけようとしているのか。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、沿岸部を中心に甚大な被害をもたらし、その後、被災地では芸術文化に関わるさまざまな活動が展開されました。

その活動の一部を共有するとともに、震災という非日常を契機に生じたこれらの動きが、日常へ向かう今後の復興過程でどのような継続性を持ちうるか？

そもそも芸術文化には、どんな必要性や意義があるのだろうか？

試みの報告を聞きながら、集まった者同士で考え合う、4時間半の場をひらきます。

日時：2013年1月26日（土）13:00-17:20

会場：せんだいメディアテーク1階 オープンスクエア

定員：200人（事前申込） 参加費：無料

ウェブサイト：<http://n-t-a.jp/>

主催：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、東京都、

東京文化発信プロジェクト室（公益財団法人東京都歴史文化財団）、えずこ芸術のまち創造実行委員会

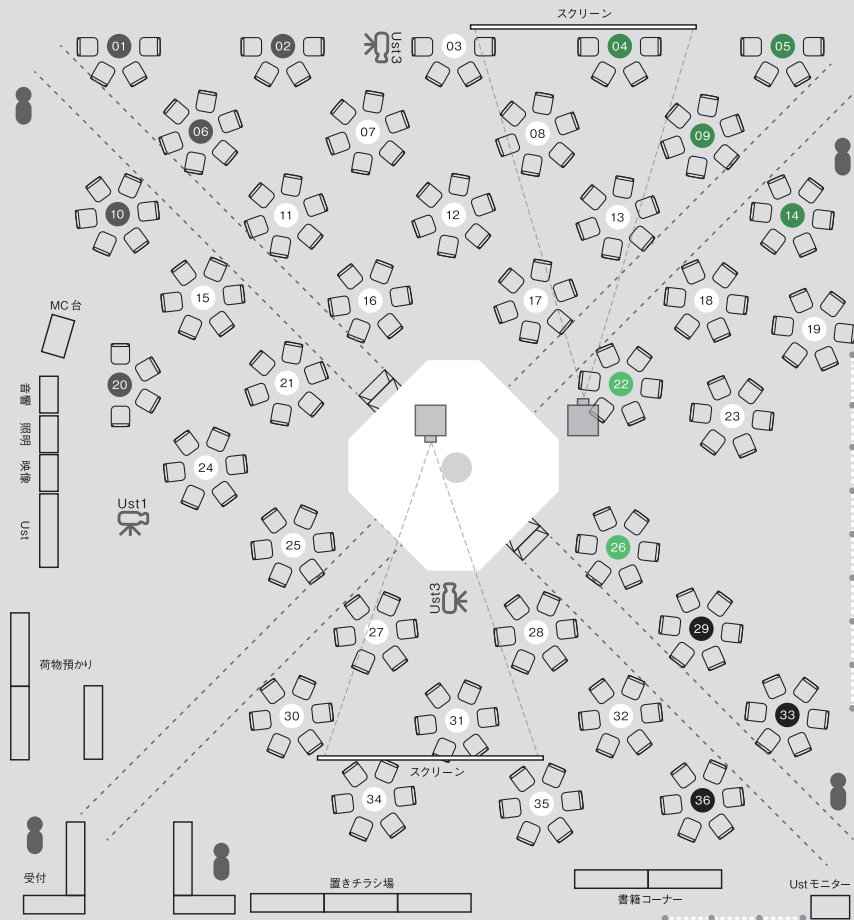
共催：せんだいメディアテーク 事務局：アートリバイバルコネクション東北

タイムテーブル

13:00 - 13:05	開会挨拶
13:05 - 13:20	趣旨説明 西村佳哲
13:20 - 14:00	基調報告 島山直哉
14:00 - 15:00	クロストーク1 鈴木拓 × 甲斐賢治 休憩10分
15:10 - 16:10	クロストーク2 日比野克彦 × 竹久侑 × 森司
16:10 - 17:10	クロストーク3 港千尋 × 熊倉純子
17:10 - 17:20	閉会挨拶

※基調報告終了後およびクロストークごとに参加者内で意見等を話し合い、共有する時間を設けます。

会場レイアウト



●ゲスト、登壇者 ●関係者 ●Ust映り込み無し ●後入れエリア

ワークシート

シェアリングワークシートは、参加者同士の「キーワードの共有」をするために使われました。
当日はトーク毎に印象深かったキーワードを記入してもらい、
そのワークシートを元と同じテーブルの参加者とシェアリングが行われました。
ワークシートは、当日会場にてスキャンされ、
「なんのためのアート」のウェブサイトにて公開されています。 → <http://n-t-a.jp/>

なんのためのアート

このワークシートの使い方は進行役からお伝えします

0 _____

1 _____

2 _____

3 _____

4 _____

このシートは英語でも、お席りの順に出口でスキャンさせていただきます。
テーマは後日、公式サイトで公開させていただきます。個人情報の記載にご注意ください。

「なんのためのアート」に参加して（自由記入）

公式サイトで公開させていただきます。個人情報の記載にご注意ください。

お住まいの地域 _____

性別 _____ ご年齢 _____

ご職業 _____

お預かりした情報は当結果が適切に管理します。
公開した情報についてご本人のお申し出があった際には、適正な範囲において、速やかに訂正・削除等の対応を行います。

1月26日、土曜日。仙台は、朝から雪が降る寒い日となった。

会場となったせんだいメディアテーク1階オープンスクエアには、6席が丸テーブルを囲む36のユニットがびっしりと並び、中央に舞台が鎮座。その光景は、あたかも披露宴会場のようである。

開場と同時に続々と参加者が会場に入る。宮城県内はもちろんのこと、関東、関西、遠くは福岡からもこの日のために来場した人たちだ。それぞれ好きな場所に自由に席をとり、同じテーブルの人たちと挨拶を交わしあう。ぎこちないながらも、“場”の共有はずではじまっている。

今日の“場”をつくる

「今日の“場”を作ってくれる方」との紹介で登場したのが、ファシリテーターの西村佳哲氏。「ここに居合わせている人たちが、お互いの視点を活かしあいながら考えられるセッティングにしたかった」と、会場の構成や今日の流れを説明する。

誰が送り手で、誰が受け手と明確に区別されない環境。それこそが、今日の“場”の意味するところ。登壇するスピーカーも全員同じフロアにいて、参加者と共に話を聞き、そして対話する。西村氏と事務局が、様々な制約の中、苦心して作りだしたこの“場”で、参加者たちがどのように化学変化を起こすのか楽しみである。

ワークシート0

参加者に入場時配られたワークシートを手に、「これは、今日どんなことを話し合ったのか、みんなで共有するためのもの。帰りがけにスキミングしてデータ化します。すごい仕掛けでしょう」と、西村氏。「ワークシートの0番に、この場に参加した動機となるキーワードを書いてください。書き終わったら周りの人と見せ合ってください」。

会場を見まわすと、案外スラスラと書けている様子。そして遠慮がちながらも、周りで見せ合いながら対話が生まれていた。それぞれ違った個性が集まったこの空間が、ひとつのテーマで語らうことでまた少し距離を縮めていく。その雰囲気に参加者も感じたはずだ。

西村氏がかかなり腐心していたのが、この「場の作り方」だ。今日この日を、スピーカーのトークを聞くだけではなく、誰もが当事者意識を持ち、考えを持ち帰ることができる“場”としたいという意図があった。ファシリテーターとして、これまで数多くの場を取り仕切ってきた西村氏だからこそのこだわりだ。いろいろな人の声を聞き、自らの声も発する。そのための会場レイアウト、ワークシート、そして参加者にもそれを理解してもらうための語りかけだ。どうやら、準備が整った。岩手県陸前高田市出身の写真家・畠山直哉氏の基調講演がはじまる一。

西村佳哲（にしむらよしあき） リビングワールド代表、働き方研究者

1964年東京生まれ。武蔵野美術大学卒。つくる・書く・教える、三種類の仕事。建築分野を経て、ウェブサイトやミュージアム展示物、公共空間のメディアづくりなど、各種デザインプロジェクトの企画・制作ディレクションを重ねる。多摩美術大学、京都工芸繊維大学 非常勤講師。著書に『自分の仕事をつくる』（ちくま文庫）など。

震災直後から故郷である被災地の陸前高田の写真を撮り続けている写真家の畠山直哉氏は、津波で実家を流され、母を亡くしている。慣れ親しんだ故郷の光景も、無残にも変容してしまった。だが、東京で暮らし、現住所を陸前高田としない畠山氏は、行政区分において“被災者”とは認められず、震災直後は故郷に帰ることさえ許されなかった。自らを「曖昧な、はっきりしないポジションに置かれている人間」と言う畠山氏と立場を同じくする人は、仙台にも、そしてこの会場にもきっと多くいるはずだ。とつとつと、重いボールを投げ込んでくる畠山氏に参加者の意識の焦点が定まったかのようだ。会場は、その一言一句を逃すまい、と固唾を飲んで次の言葉を待っている。

“アホ”な質問

「実は、今日のチラシを何人かの友人に見せました。そうしたら、あるアーティストがこの言葉（＝なんのためのアート）を見て一言。『アホな質問』と」。…と、のっけからの衝撃。参加者の中には苦笑を浮かべている人もいる。「確かに、『何のため?』と悩んでいるより、一言「アホ」と言い切る方が、アーティストとしては断然正しい」。

そうなのだ。畠山氏は、“被災者の家族で、被災地が故郷。だが被災者ではない”というだけでなく、アーティストとして被災地に向き合うというポジションにもある。もし、この震災が畠山氏の故郷ではない場所でおきたとしたら、畠山氏も「アホな質問」と言い切れたのかもしれないと、同情のような気持ちがわいた。

あの日から、陸前高田に関わる仕事しかしていないという畠山氏は、「自分が津波の前にどんなアートをしていたのか、うまく思い出せない」と告白する。3.11は、まさに日本におけるパラダイム・シフトだったのだ。

私は、常に私たちだ

「なんのためのアート」という問いへのヒントを、畠山氏の言葉の中に見つけた。「誰かがいる限り私は動くことができる、だから歩いて三脚を立ててファインダーを覗いてシャッターを切る、誰かが私と共にいる限り“私は、常に私たちだ”」。その「誰か」を特定できないことが、アートが存在する理由を定義づけるのかもしれない。

この畠山氏の講演を受け、思ったことをワークシートの1に書き込む。一人の女性に声をかけてみた。仙台市在住で畠山氏の基調講演を目的に参加したという彼女は「震災後、ずっと自分の中に抱えていた曖昧な感じを、抱き続けていていいのだよ、と言われたようだった。それだけでも、救われた気がする」と話した。

「なんのためのアート」という問いに、導き出せる明快な答えはあるのだろうかと思っていたが、その片影が見えたようだ。

畠山直哉（はたけやまなおや） 写真家

1958年岩手県陸前高田市生まれ。筑波大学大学院芸術研究科修士課程修了。以降、東京を拠点に活動を行い、自然・都市・写真のかかわり合いに主眼をおいた一連の作品を制作。1997年木村伊兵衛写真賞受賞。2012年、東京都写真美術館にて津波被災後の故郷、陸前高田の風景を含めた展覧会「ナチュラル・ストーリーズ」を開催。同年、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。

畠山氏に続き、ここ仙台にいて、震災後のさまざまな活動を行ってきたふたりからの報告が行われる。

まずは、アートリバイバルコネクション東北（ARC>T）事務局長の鈴木拓氏から活動報告が行われた。地元で演劇、アート活動に携わってきた人々で組織されたARC>Tは、震災後1カ月足らずで立ち上がり、ゴールデンウィークにはすでにアートプログラムを実施していたという。その活動はまさに「人や街とアートをつないできた」と言える。

鈴木氏は、「東京に行くと“アートは有事の際に役に立ったか?”と聞かれることも多い。だけどその問いに対する答えをまだ僕は持っていない。そのモヤモヤが、先ほどの畠山さんの講演を聞いて少しスッキリした」と言う。なるほど。被災地に少なからず縁のある人間は皆、この種のモヤモヤを抱えていてしかるべきなのか。

鈴木氏からマイクを渡されたせんだいメディアテーク企画・活動支援室長の甲斐賢治氏は、個人が震災に関する映像、写真を制作しアーカイブする『3がつ11にちをわすれないためにセンター』、哲学的な対話をやわらかな雰囲気の中で行う『哲学カフェ』について説明。仙台市中心部にいて感じる沿岸部との決定的な“被災の格差”、哲学者の鷺田清一氏はこれを“隔たり”と呼んでいるが、どちらの試みも、その隔たりを行き来する回路を構築するのが目的だったという。

人前で話すのがいい

ここで西村氏が加わり、鈴木氏と甲斐氏のクロストークに移る。人が集まれる“プラットフォーム作り”を行ってきたふたりだが、甲斐氏が「ARC>Tは職安状態になっていたのではないか。アーティストが自分の活動をするための場を作っていたような気がする」と過激に分析すると、鈴木氏は「確かに、個人個人の思いはあっただろうが、ひとつの理念のもとに集まってきたとは言い難い。見つめ直す時間が足りなかった」と答える。すかさず、西村氏が「どうやって見直す?」と問うと、鈴木氏は「対話によってしかない」。それを受けて甲斐氏は「やっぱり人前で話すのがいいね。考えをまとめないといけなし、ソリッドになる」と語った。

このクロストークを終え、聴いている参加者だけでなくスピーカーもまた、対話を通じて思考に肉付けをしているような印象を受けた。「なんのためのアート」という問いについても、人との対話によってしかその答えが見いだせないのではないか。そう感じた。

ここで、参加者はワークシート2への記入を行い、西村氏から席替えを促される。一瞬、場内はざわついたが、未知への航海を楽しむかのように、参加者たちはワークシートを片手に新たなテーブルへと移っていった。

甲斐賢治（かいけんじ） せんだいメディアテーク企画・活動支援室長

大阪生まれ。「remo」記録と表現とメディアのための組織、「recip」地域文化に関する情報とプロジェクト、アートNPOリンク、芸術生活研究所hanareなど複数のNPOに参加、社会活動としてのアートに取り組む。2010年春より現職。平成23年度芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

鈴木拓（すずたく） Art Revival Connection TOHOKU 事務局長

1978年宮城県仙台市生まれ。2000年に演劇企画集団・きらく企画・を立ち上げ。舞台監督として活動。2006年演劇専用空間Galleryone LIFEを運営。2008年杜の都の演劇祭プロジェクトに参加、2010年よりプロデューサーに就任。東日本大震災を機に設立した、文化による復興支援組織 Art Revival Connection TOHOKU 事務局長。仙台を中心に東北の舞台芸術の活性化を目的に、2012年8月よりboxes Inc.を設立。同代表。震災後に生まれた様々な繋がりにより有機的に継続していくため活動中。



- 1 森司
- 2 森司×日比野克彦×竹久侑 (左から)
- 3 畠山直哉
- 4 鈴木拓×甲斐賢治 (左から)
- 5 日比野克彦
- 6,7 会場風景
- 8 熊倉純子×港千尋 (左から)
- 9 西村佳哲

写真：越後谷出

席替えが行われ、休憩中に新しい同席者との挨拶をすませた会場は、風が通ってなにか新鮮な気分となった。

そんな中、アーティストで東京藝術大学教授の日比野克彦氏が口火を切る。震災後、自身を中心となって行っている『HEART MARK VIEWING』の活動を紹介した。「作品を作るには『何色を使おうかな』とか頭の中で想像しなくちゃいけない。想像したら手を動かさなくちゃいけない。手を動かすと、3分後には形になっている。何か想像して行動すれば形になる。止まってしまっていた時間から、数秒先を想像して動こうよ、ということになったのかな」と語った。“つくることは生きること”。作ることで止まった時間が動き出す。そうして次の一步を踏みだすことができた人も多いただろうことは、想像に難くない。

と、ここでマイクが竹久侑氏に渡る。水戸芸術館現代美術センター学芸員の彼女は、被災後、「公立美術館の学芸員としてできること」を模索していた。しかし、震災後、アートに何ができるかを問うことは、アートは無力であると嘆くことに見えた。ジレンマを抱えつつも、「芸術文化に従事した人の活動の記録、考えるための装置としての装置」として『3.11とアーティスト 進行形の記録』を2012年10月から12月まで開催した。ここでは、震災後のさまざまなアーティストの表現、作品、記録が網羅された。展示会場の風景とともに、アーティストたちの渾身の試行錯誤の現われである作品群が、会場の2つの大きなスクリーンに映し出されていく。

まだ始まっていない

ここで西村氏から「全景をとらえている人物」と紹介され、今日のこのイベントの仕掛け人でもある東京アートポイント計画ディレクターの森司氏が登壇。「『HEART MARK VIEWING』は、“私”というものを取り戻すための“私たち”として、ものすごく機能していた。竹久さんの展示会はものすごくチャレンジングだった」と評価した。

1995年に起こった阪神淡路大震災後のアーティストによる活動をタイムラインにまとめた資料を提示しながら、森氏が「この年表を見ると、もしかしたらまだまだ始まっていないものばかりなのではないか、という思いがする」と、発言したのは印象的だった。確かに、そこには、阪神淡路大震災の10周年を機に生まれた芸術文化活動もあり、しかもそれが現在も継続中となっている。おそらく、この3.11でも、今後多岐に渡った活動が生まれくるだろうことが予想された。そして、きっと新しいアートアクティビティが起こるたびに、今日の『なんのためのアート』というキーワードを、私たちは想起するのではないだろうか。ワークシートの3には、皆、どんなキーワードを書きこんだのだろうか？

日比野克彦（ひびのかつひこ） アーティスト、東京藝術大学教授

1958年岐阜市生まれ。東京藝術大学大学院修了。80年代に領域横断的、時代を映す作風で注目される。2003年、越後妻有アートトリエンナーレで「明後日新聞社文化事業部」を設立。2005年水戸芸術館 [HIBINO EXPO]、2007年金沢21世紀美術館 [「ホーム→アンド→アウェイ」方式]、熊本市現代美術館 [HIGO BY HIBINO] など個展を開催。2010年から3カ年計画にて舞鶴で造船中。日本サッカー協会理事を務める。震災後、復興支援活動「HEART MARK VIEWING」を立ち上げ、モノを作る喜びを取り戻すきっかけを作り、人と人を繋ぐ試みを行う。

竹久侑（たけひさゆう） 水戸芸術館現代美術センター学芸員

1976年大阪府生まれ、茨城県水戸市在住。慶応義塾大学総合政策学部卒業。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ修士課程クリエイティブ・キュレーティング修了。2007年より現職。公私を跨がりプロジェクトの実践を通して、芸術と社会、芸術とコミュニティの関係性、芸術の公共性について探求。主な展示会として「3.11とアーティスト：進行形の記録」（2012）、「大友良英『アンサンブルズ2010ー共振』」（2010-2011）。「リフレクション・映像が見せる“もうひとつの世界”」（2010）。水と土の芸術祭2012ディレクター。MeToo推進室メンバー。

森司（もりつかさ） 東京アートポイント計画 ディレクター

1960年愛知県生まれ。公益財団法人東京都歴史文化財団 東京文化発信プロジェクト室地域文化交流推進担当課長。東京アートポイント計画の立ち上げから関わり、ディレクターとしてNPO等と協働したアートプロジェクトの企画運営、人材育成プログラムを手がける。2012年7月より「Art Support Tohoku-Tokyo（東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業）」のディレクターも務める。

クロストークのラストは、写真家で著述家の港千尋氏と東京藝術大学教授の熊倉純子氏だ。港氏は、昨年上梓した著書『芸術回帰論』について、そのきっかけとなった出来事を紹介した。「石巻で、津波で倒壊した家の下敷きになって、9日ぶりに救出された高校生がいた。その高校生は、後日『将来、芸術家になりたい』と言った。その言葉がなかったら、僕はこの本を書くことはなかった」。九死に一生を得た若者が、最初に口にした希望の言葉が『芸術家』。これは、芸術に関わる多くの人にとって、救いとなる言葉なのだろう。

熊倉氏は、昨年、岩手県大槌町で行ったきむらとしろうじんじん氏による野点についての報告を行った。「大槌で、現地の方の“外（部）とつながりたい”という渴望を感じて、頼まれてもないのに、出会いの場を作りたくなった。それでじんじんさんを巻き込んだ」。スクリーンには、大槌町の人たちがドラッグ・クイーンのような出で立ちのじんじん氏と野点を楽しむ姿が映し出された。そこが被災地であるということ、参加者が被災者であることは一切感じられない、そんな笑顔が写し出されていた。

港千尋（みなとちひろ） 写真家、著述家

1960年生まれ。1995年より多摩美術大学情報デザイン学科教授。オックスフォード大学客員研究員。著書・作品集多数。記憶とイメージをテーマに、映像人類学など幅広い活動をつづけている。近著に『愛の小さな歴史』（インスクリプト）「パリを歩く」（NTT出版）『芸術回帰論』（平凡社新書）『ヴォイドへの旅』（青土社）。最近の展覧会に『レヴィ＝ストロースの庭』（Gスクエア 名古屋）『アジアの痕跡』（ANUギャラリー キャンペラ）。台北ビエンナーレなど国際展のキュレーションも行い、2007年には第52回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナーを務めた。

熊倉純子（くまくらすみこ） 東京藝術大学教授

バリ第十大学、慶應義塾大学卒業。1992年から2002年まで（社）企業メセナ協議会に勤務。企業のメセナ活動や芸術普及プログラムなどの研究・開発に携わる。専門は文化環境論（文化支援）、アートマネジメント。2002年4月より東京芸術大学に新設された音楽環境創造科で社会と芸術を結ぶ人材を養成する。著書に『社会とアートのえんむすび 1996-2000 一つなぎ手たちの実践』（共編。ドキュメント2000プロジェクト実行委員会発行、トランスアート）。

すべてはオン・ゴーイング

クロストークに移ると、西村氏から熊倉氏に質問が飛ぶ。「先ほど、鈴木さんが“アートは何の役に立ったか?”という質問をされると言っていたけれど、熊倉さんならどう答える?。「基本的には何の役にも立たないのがアートだと思っている」と答える熊倉氏。きっとアートとは、無用の用そのものなのだろう。

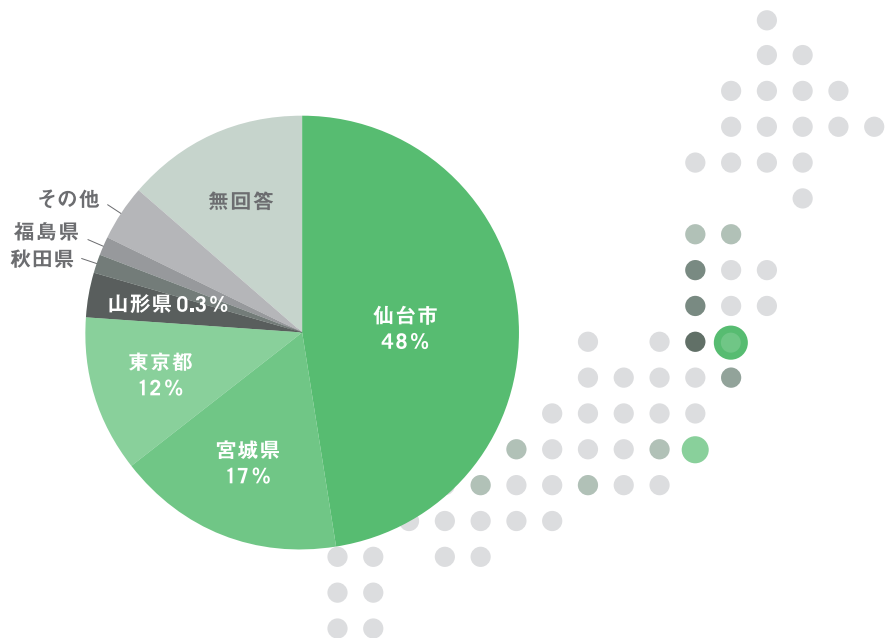
港氏はアートの存在意義について、内戦の続くサラエボで演劇を続けたスーザン・ソントグの活動を例にあげ、「人はパンのみにて生きるにあらず」と答えた。「ソントグは、“事後は事前”と捉えていた。我々も、今を震災後と言っているが、もしかしたら震災中、もしくは震災前なのかもしれない」と言った。これは、まさに森氏の「まだ始まってもないことばかりなのでは」という指摘そのものではないか。

クロージングに再び登場した森氏が、これまでの話を受け、「すべては“オン・ゴーイング”なのではないか」と総括した。と、そこで、西村氏が基調講演をした畠山氏に「何か加えて話したいことは無いか」とマイクを向ける。畠山氏は「長くなるから…」と一度は辞したが、西村氏の、そしてなによりも会場の強い期待を感じたからか、再び話を始める。「『気仙川』という、震災前後の陸前高田の写真を取めた本を出して、初めて読者に『ありがとう』と言われた。そう言われて戸惑うばかりなのだが、先ほど私が話した『誰か』と一緒に聴く言葉としては、本当に嬉しく受け入れられる」。

この「ありがとう」こそ、『なんのためのアート』をひも解くキーワードのように思えた。はたしてほかの参加者は、どのような思いを持ち帰ったのだろうか。オン・ゴーイング、問いはこれからも続くー。

「なんのためのアート」広報チーム
岡沼美樹恵＋遠藤瑞知

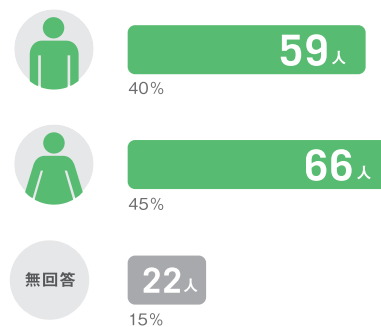
どこから来たのか



せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないためにセンター」のご協力により
収録された当日の録画映像は、以下のウェブサイトにて全編ご覧いただけます。

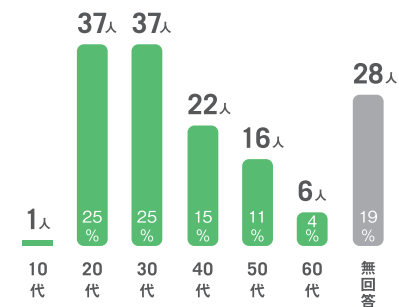
<http://recorder311.smt.jp/movie/25155/>

男女比



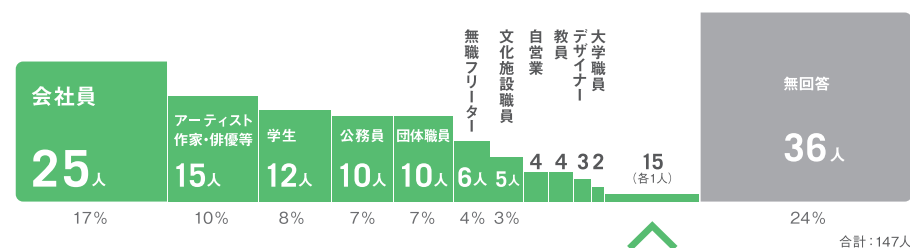
合計:147人

年齢比



合計:147人

職業別



合計:147人

コーディネーター、編集・ライター、イラストレーター、舞台技術演出制作、文化財関係、庭師、福祉関係、まちづくり
コンサルタント、専門職、農業、ビジネスマン、飲食店、会社役員、会社顧問、NPO 理事

事務局後記

「今までにない新しい対話の場にしよう」

このプロジェクトが始まった当初の会議で運営チームが共有したテーマだった。文字通り会場レイアウトは、せんだいメディアテークではこれまで行われたことのない設えに挑戦することになる。メディアテークの担当職員さんも共感してくださり、この前代未聞なアイデアを実現するため、関係各所との折衝を繰り返し行ってくださった。開催2日前に認可が下りたときには、ホッと胸を撫で下ろしたことを覚えている。

今回の場はとにかく、参加者も含めその場に居合わせた全員に当事者意識を持って帰ってもらうこと、またここで行われる対話を通し、それぞれの中に自分が担い手の一人であることへの気づきが起こることを目論んでいた。西村さんのデザインで行われたテーブルシェアリングでは、地域や世代、ジャンルを越えて様々な立場の人々が、目の前に提示された問題について語り合っていた。

帰り際のワークシートの一斉スキミングも、方々から「無茶だ」と言われながらも、その必要性を優先しチャレンジしてみた。当初このアイデアが生まれたとき「はたしてみんな書いてくれるだろうか?」「あとでWEBに公開するって前提は乱暴ではないか?」など事務局も不安を抱えていた。しかし結果を見ればワークシートは確かに対話の手助けになったし、回収率95%を超えたそのシートに書かれた内容は、ここで“新しい対話の場”が生まれたことを実感させるものだった。

宮城県と東京都の共催で、文化芸術をテーマにした事業をこれほど多くの方々を巻き込んで行えたのは大きな成果だと思う。震災を経験してしまったこの土地で、これからもっと多くの対話が必要になってくるだろう。熱を通わずするためにはもっと小規模な場も必要だが、官民協働で一年に一回こういう場があるのもいいと、夢想している。

アートリバイバルコネクション東北 鈴木拓

本冊子は、芸術銀河2012×Art Support Tohoku-Tokyo
(東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業)
「なんのためのアート」のドキュメントとして制作されました。

2013年3月

発行：宮城県、みやぎ県民文化創造の祭典実行委員会、
東京都、東京文化発信プロジェクト室(公益財団法人東京都歴史文化財団)、
えずこ芸術のまち創造実行委員会